

を目標した場合には攻撃する、と声明していた。米国が英国の同盟国として全面的に戦闘に巻き込まれるのも、まずまず時間の問題となつていようと思われた。ソ連によるヴォルガ・ドイツ人の移送に促された、このような時期のユダヤ人の移送は、米国が参戦すればヨーロッパ・ユダヤ人が代償を払ふことになるという自身の予言を、米国人に思い出させようとするヒトラーの露骨な警告だったのだ。

そうした考えを抱いていたヒトラーは、いまやハイドリヒとヒムラーから出された提案に賛成した。彼ら自身の部下や大都市の大管区長から届いた要求や意見を踏まえたその提案は、全面的な「ユダヤ人問題解決」のための積年の計画を実行に移すことが緊急に必要であり、当地で戦争が続いているものの、東方への移送は実行可能だと述べていた。なぜヒトラーが今度はそのような論拠に同意したのかという理由の一端も、対ソ戦の早期終結は望めないという事実を彼が受け入れたことにある。実際、それは東方での戦争が一九四二年まですれ込むとヒトラーが認めた時期だった。ユダヤ人問題の最終解決との取り組みを、それほど長くは待てない。もしホリシエヴィズムに対する勝利が遅れるなら、**自身の最も強力な敵であるユダヤ人との決着はもはや先送りできない**、とヒトラーは結論づけたに違いない。ユダヤ人が戦争を引き起こした。連中は自分の「予言」が実現するの

人を東方へ移送する要求に同意した。彼らのなかには、ウーチ・ゲットトへの一時滞在を経て（そこはすでに深刻な過密状態だと知られていた）移送された人びともいた。それはジェノサイドの包括的プログラムが次第に姿を現すなかで、決定的な新段階への引き金となった。続く数カ月間に矢継ぎ早に新たな措置が取られ、殺戮の範囲が拡大していった。

激しい戦いが続くなかで、ドイツ、オーストリア、チェコのユダヤ人の東方移送を開始する決定は、ユダヤ人の命運を決した。それはヨーロッパ全土のユダヤ人問題の最終解決に大きく近づく一歩だった。われわれにできるのは、そこにどのようにして至ったかに思いを巡らし、九月一六日の昼食やその後のヒトラーとヒムラーの一連の会話を推測することだけである。

両者の協議はほぼ間違いなく、恐るべきものではあるが、一般的なレベルにとどまっただろう。包括的な移住構想と、とりわけ「ユダヤ人問題の全面解決」に関するハイドリヒの計画の遂行は、ドイツ国とペーメン・メーレン保護領のユダヤ人の東方移送から着手できる、と恐らくヒムラーは主張した。それはソ連が行ったウォルカ・ドイツ人の追放に対する当然の報復であり、ナチ党の念願にもかなうだろう。また大都市の住居問題の緩和によって、大管区長の不満にも対処できる。そしてそれは（ヒトラーの印象に残ったに違いない論拠なのだが）、

を目的にしたりするだろうと。

ヒムラーが九月一六日にヴォルフスシャンツェでヒトラーと昼食を取った際に、移送問題が話題に上らなかつたとは考えにくい。親衛隊全国指導者がドイツ国内のユダヤ人の移送を迫ったのはほぼ確実と思われる。翌日、リップントロップは、ローゼンベルクの提案について話し合うためにヒトラーと面会した。その九月一七日の晩、ヒムラーは外相のもとを訪れた。この時までにヒトラーは、ドイツ、オーストリア、チェコのユダヤ人の東方への移送開始に賛成していたに違いない。ヒムラーは明らかに許可を得て帰途につき、翌日、決定を通知した。

この出来事に直接の役割を演じたのは、またしてもヴァルテガウだった。九月一八日、ヴァルテガウの**国家総督**が大管区長のアルトゥア・グライザーは、ヒムラーからの書簡を受け取った。それには、「総統は旧本国とペーメン・メーレン」「ホヘミア・モラヴィア」保護領が、できるだけ速く西から東へユダヤ人のいない地域となり、彼らから解放されることを望んでいる」と書かれていた。ヒムラーは、まずユダヤ人を二年前にドイツに編入されたポーランド地域に移送し、その後、「翌春に彼らをさらに東方へと追放する」つもりだとグライザーに言った。これを念頭に彼は、冬の間にはグライザーの支配地域にあるウーチに六万人のユダヤ人を送ろうとしていた。その後九月中旬、ヒトラーはドイツとチェコのユダヤ

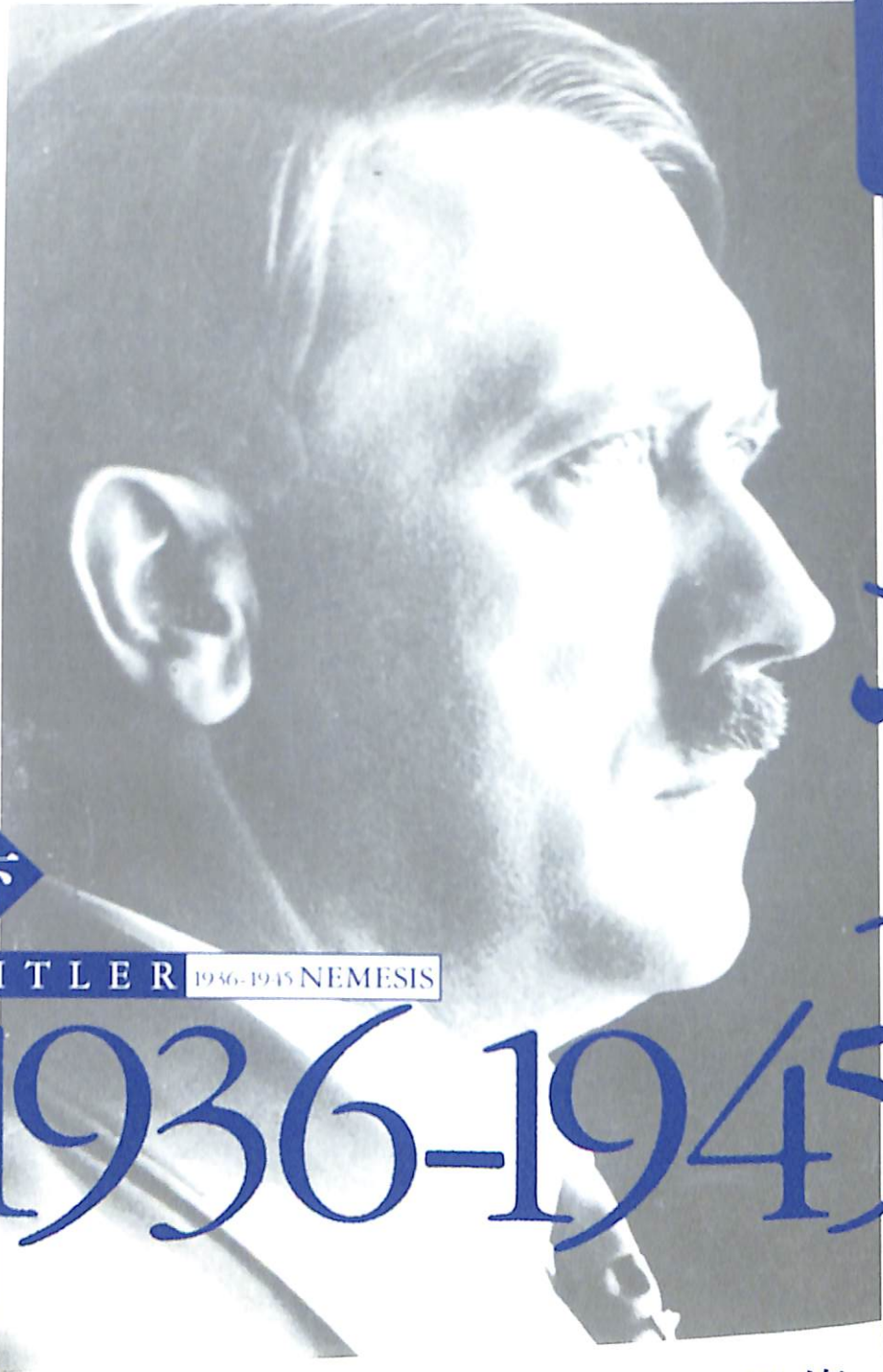
ユダヤ人が移送で不満を感ずるのを防ぐのを助ぐだろう。移送されたユダヤ人の居住地域には、さしあたり放棄されたソ連の労働収容所を充てればよい。そこで彼らを死に絶えるまで働かせることができる。労働不能なユダヤ人と一緒に、あらゆる「危険分子」を即座に処刑できるだろう。そうヒムラーは続けたと思われる。ことによるとヒムラーは移送の困難を認め、翌春か夏にさらにロシアへと移送するまでは、ユダヤ人はまずポーランドまでしか送れないことを受け入れたのかもしれない。その頃には、戦争は最終的に終結しているだろうと推測されていた。けれども、詳細が議論されたとは考えにくい。

ドイツのユダヤ人を段階的に移送すべきだという点で合意したとしても、東欧、とりわけポーランドの数百万のユダヤ人をどうすべきかという問題が残った。ハンズ・フランクは総督府領からユダヤ人を迅速に移動させるといふ確約を得ていたし、アルトゥア・グライザーはヴァルテガウからのユダヤ人の移送を熱望していた。ヒムラーがこれらの問題を話題に上らせたとすれば、彼は労働不能のユダヤ人を手始めに、ポーランド内部で「問題解決」に尽力する許可を与えられただろう。

乏しい食糧資源の消費問題は決定的な理由となり、絶滅の嵐を巻き起こすのに不可欠な要素となった。「お荷物になつていく人間」を養っているという考えは、ドイ



# ヒトラー



イアン・カーショウ

著 ◆ 福永美和子  
監修 ◆ 石田勇治

下

HITLER 1936-1945 NEMESIS

天罰

# 1936-1945

権威の絶頂から  
総統地下壕の  
最期まで  
後半生を活写、  
ヒトラー研究の  
金字塔！

なぜ未曾有の  
侵略戦争と  
ホロコーストは  
起きたのか？  
なぜヒトラーとドイツは  
自己破壊へ  
突き進んだのか？

全 **2** 巻  
口絵写真  
48頁  
地図8点  
収録



白水社  
白水社創立百周年記念出版